

竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER



第25回交流会（桂浜にて）



Contents

- P.2 一語一会
「虚しく往きて実ちて帰る」
- P.3 第25回交流会レポート
(四国旅行)
- P.6 第26回交流会レポート
(歌舞伎の鑑賞)

その夢は、きっと世界を変えていく
The dream surely changes the world.

SPECIAL REPORT Iより (シユエタゴンパゴダ)



第25回交流会（四万十川にて）

- P.7 財団活動報告
- P.8 竜の子近況報告
- P.12 竜の子(OB・OG)近況報告
- P.14 SPECIAL REPORT I
- P.15 SPECIAL REPORT II
- P.16 編集後記

第15号
Mar.2015


Tatsunoko Foundation

 公益財団法人 竜の子財団

虚しく往きて実ちて帰る

虚しく往きて実ちて帰る。この言葉を竜の子奨学生の皆さんに贈ります。これは、今から1200年前、わが国に真言宗を開き、今日弘法大師と崇められ讃えられる空海の言葉です。

弘法大師空海は生を讃岐の国屏風ヶ浦（現在の香川県善通寺市）に受け、18歳で都の大学に学ぶも官吏養成の学問でしかない当時の大学に失望。真の道を求めて出家します。そして、31歳のとき、仏教の奥義を求めて遣唐使の一員に加わり、当時の世界最先端の都市・唐の長安（現在の中国・西安）に留学を果たしたのでした。

東シナ海の波濤を越え艱難辛苦の末、長安にたどり着いた空海は師と見定めた青龍寺の恵果阿闍梨の門を叩くと、恵果阿闍梨はこの青年僧を見るや「私はあなたが私の元に来ることを長らく待っていた。今日ようやく会えた。大いによし。大いによし」とその器量をたちどころに見抜き、千人を超える門弟のなかでただ一人、この異国から来た青年にインド伝来の密教の奥義のすべてを授けられたのでした。

そして、恵果阿闍梨は空海に「このうえは早く本国に帰り、この教えを天下に弘め人々の幸せを増すために尽くしなさい」と遺命するや示寂されます。空海が恵果阿闍梨に師事した期間はわずか半年ばかり。この師の遺命に報いるべく空海は20年間の留学期間を切り上げただけに帰国、そして、真言密教の教えを開くとともに、書や詩、文学など文芸はもとより算術、天文、工芸、土木工学など唐での留学で学んだ成果をのちに神泉苑での祈雨の修法やわが国初の庶民のための学校である綜芸種智院の創設、満濃池の修築などありとあらゆる分野に華開かせたのでした。

空海はみずからのこの入唐求法を「虚しく往きて実ちて帰る」～なにも持たずにやってきて大きな実りを手にして帰る～と感動をもって伝え残しました。

真言密教を確立した宗教的天才。のみならず、文学や教育、医療、建築土木などあらゆる分野に精通し今日のわが国の文化の基礎を形づくった巨人空海。この一見バラバラに見えるその八面六臂の活躍の源にあったのが師・恵果阿闍梨との出会いであり、「人々の幸せのために尽くしなさい」との遺命であったのでした。人々の幸福のため自国のみならず世界の発展向上のため、みずからが持てるすべてを用い世のために尽くすこと。それがその生をより高く全うすることだということです。

アジアの有為の学生諸氏の留学を支援する竜の子財団の活動はまさに未来の空海を生む尊い働きです。そして、竜の子奨学生の皆さんの日本留学が「虚しく往きて実ちて帰る」ものであることを願ってやみません。

海老塚 和秀

- ・昭和33年9月、高知市に生れる。
- ・昭和58年3月、大正大学仏教学部卒業。
- ・在学中の昭和55年12月、四国霊場第31番札所・竹林寺住職に就任。
- ・爾来、札所寺院として数多の遍路人とふれあうとともに、「祈り・学び・楽しむの場」として現代に開かれた寺の姿を求めて活動を続ける。伝統行事のほか、中秋名月の夕べのコンサート「観月会」、夏休みに小学生を対象とした寺小屋「一日一休さん」、さらには、環境・まちづくり・四国遍路・癒しなどをテーマにしたイベントなど多数開催。



「一語一会について」

竜の子奨学生にとって、財団関係者からの励ましの言葉は、大変貴重なものです。そして、竜の子奨学生には、その言葉は一生に一度の出会いであると心得て、そこから多くのことを学んでほしいという願いを込めて、このコーナーを「一語一会」と名付けました。

ご寄付いただいた皆さまへ

この度、竜の子奨学生を代表して、ご寄付をいただいた皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。夢と不安を持って、母国を出て日本へ留学に来て、自分の研究や夢や、やりたいことに専念することができる竜の子財団の奨学生になれ、私達は恵まれていると思います。後ろで見守ってくださり、支えてくださる竜の子財団は、いつも家族のような温もりと、夢を向かって前進する勇気を与えてくれます。それは私達のような母国を出て家族と別れた留学生たちにとっては、経済的なサポートより、ずっと大切なものかもしれません。皆様のおかげで、留学生活を楽しむことができました。これからの人生においてどのような道を歩んでも、竜の子財団と日本社会を忘れず、いつか恩返しができるよう頑張ります。

（平成24年度竜の子奨学生 東京外国語大学大学院 朱 琳）

第25回交流会レポート

平成26年7月20日～21日、竜の子奨学生の第25回の交流会が坂本龍馬の故郷、四国の高知県で行われました。日本三大清流の一つである四万十川でのカヌー体験、温泉満喫、土佐の宵祭り、鰹たたき体験、そして、坂本龍馬記念館見学と桂浜散策など、思い出いっぱいの交流会でした。

● 1日目 ●



龍馬空港にて

2014年7月20日、待ちに待った夏交流会の日がやってきました。当日の朝、出発まで交流会の場所が秘密にされていたため、羽田空港に集まった参加者のみんなは小さな声で「どこに行くのかな」と、情報交換しながら期待に胸を膨らませていました。しばらくして参加者が揃うと、とうとう「秘密」の発表のときがやってきました。「今日は四国へ飛びます！」－「わあ～～～！」「やった！」とハイテンションな旅の始まりでした。

羽田空港から四国高知県の龍馬空港までのフライトは1時間半弱と、あっという間のものでした。夏らしい青々とした空、澄み切った四万十川、バスの中から日本原風景のような清々しい景色を眺めながら、四国の大自然の懐にすぐにも飛び込んでいきたくかったです。この願いは、その日の昼食後に、四万十川でのカヌー体験という形で見事に叶いました。

私たち参加者にとって、このカヌー体験は人生初体験であることはもちろん、中には「カヌー」という単語を初めて耳



カヌーを前に集合写真

にする人も少なくなかったようです。カヌー体験であると同時に、日本語の勉強にもなりました。まず、カヌーで入水する前に、事前準備として、スタッフから注意事項の説明や、漕ぐ動作の簡単な指導が行われました。その丁寧な説明のおかげで、私たちは全く動揺することなく、わくわくした気持ちで川に入り、上手にカヌーをコントロールしながら、ゴールに向かって進んでいきました。途中、すごい雷雨に遭遇したため、びしょ濡れになっ



カヌーで入水する前の陸上練習

てしまった私たちでしたが、今度はそれを逆手にとって、子供のように、水遊びをし始めました。水を掛け合ったり、追いかけてこしたりしながら進んでいき、笑い声が絶えない4kmほどの川下りコースとなりました。そして、いよいよ川下りコースのゴールが見えたところで、参加者2名のカヌーが転覆するハプニングが発生しました。幸い、安全対策が万全であるため、2人とも自力でカヌーに戻り、みんなと一緒にゴール達成の喜びを分かち合いました。



四万十川のカヌー体験の様子



カヌー体験が始まる前にわくわくしている秋元理事長

カヌー体験の後、すぐ高知市内の温泉旅館に向かいました。そこで、1日の疲れを温泉で癒し、私たちはすっきりした気分で浴衣に袖を通しました。そして、次に待っていたのは、楽しい食事会でした。鮮やかな浴衣を着て、笑顔で撮った記念写真が、この夏交流会1日目の良い思い出となりました。



綺麗な浴衣姿

た。そしてその日は、さらに幸運なことに、ちょうど地元の「土佐の宵まつり」の最終日だったため、食事会の後、私たちはお祭りにも足を運びました。地元のお祭りの楽しい雰囲気に入れながら、最高の気分で交流会の1日目を締めくくりました。



土佐の宵まつりにて

(担当：平成26年度竜の子奨学生 名古屋大学大学院 許 臨場)

● 2日目 ●

交流会の1日目は運動中心であったと言うなら、2日目は勉強の時間であったと言えるでしょう。最初に行ったのはお寺でした。高知市五台山にある真言宗智山派の竹林寺というお寺でした。五台山といえば、中国から来た学生達にはよく知られているが、みんなが思い出したのは中国山西省にある五台山のことでした。実は、高知にある五台山は中国にある五台山と深い関わりがあります。竹林寺の住職によると聖武天皇が唐の五台山で文殊菩薩に拝する夢を見た後、五台山

に似た山を捜すように命じたのがきっかけの事でした。

住職は竹林寺の歴史の紹介をしながら私達をお寺の正殿である本堂まで連れて行った後、教育的意義に富んだ仏教の授業を聞かせてくださいました。「勤行聖典」を読み上げる時、意味の分からなかった部分がたくさんあったが、悪いことはしないで善いことをし自らの心を浄めるという誰にとっても分かりやすい仏様の教えをみんなはよく理解できました。

その後、客殿に連れられて、書院造りの主屋で仏教の経典



住職のお話を聞いている竜の子奨学生達



一人一人が鐘をつきました



座禅を組んでいる竜の子達



「七仏通誠偈」と「十善戒」を写経しました。人間である誰でも勉強や仕事や遊びなどで充実な毎日を送ろうと思っているかもしれないが、たまに、お寺に行って仏様に礼拝したり経典を読む事を通じて心を静めて自分の人間としての歩むべき道を考えるのも良いのではないのでしょうか。どうすれば合格した人間になれるかの方法について勉強以外は、竹林寺の本尊、「智恵の仏さま」、「三人寄れば文殊の智恵」と親しまれる文殊菩薩から智恵をいただくこともできました。最後は、「ともしびの仏」と「善財童子の旅」という2冊の本をいただき、ずっと付き添ってくれたお坊さん方に御礼を言って竹林寺をあとにしました。



経典「七佛通誠偈」と「十善戒」



これから写経をします

仏教の勉強をして、お腹が空いて来た私達はバスで港に移動し、「鯉の船」という船の形をしているお店に入りました。みんなはそれぞれ先に用意してあった生鯉を取り、燃えている藁で初めての鯉のたたきを体験しました。鯉のたたきの美味しさが初めて分かりました。今までに食べた事のない美味しさ！また、しらすを見たことない人の中には、しらすを食べることを怖がっていた人もいました。それでも、御飯にしらすを入れてご当地名物の柚子ポン酢をかけた後、混ぜて食べるよう店員さんに教えていただいて、一口食べたら「まさかの絶品です！」と感動しました。



鯉を藁で焼きます

最後に行ったのは太平洋に臨む海岸である高知の名所—桂浜です。青々とした松、きれいで軟らかい砂と紺碧の海との融合で、とても景色がいい所でした。また、月の名所としても知られているが、坂本龍馬の銅像がある浜辺として知られている桂浜の方が更に有名です。みんなで一緒に「美しい日本の歩きたくなるみち500選」に



桂浜海岸

選ばれたこの景色を楽しみながら散歩した事は今だに忘れられません。また、太平洋をのぞむ桂浜公園の丘に建ち、坂本龍馬

の生涯を紹介する資料館「坂本龍馬記念館」に入り、展示された歴史的にも貴重な資料を見ることができました。景色も歴史も満喫した後、坂本龍馬の銅像の前で写真を撮り、竜の子奨学生の第25回の交流会の幕を下ろしました。

坂本龍馬は薩長同盟の斡旋と大政奉還の成立に力を尽くし、倒幕と明治維新に大きな影響を与えた偉大な人物です。彼は遊学するために、家から出て江戸に行って、砲術、漢学、蘭学などの学問の勉強と剣術を修行し、これらのこと坂本龍馬が大きな成果をあげることができるようになりました。いつの時代でも、た



等身大の坂本龍馬像と一緒に

(担当：平成26年度竜の子奨学生 明治大学 王 娅琴)

第26回交流会レポート

平成26年12月7日（日）第26回竜の子交流会が開催されました。竜の子奨学生たちは日本伝統文化を体験するため、国立劇場で歌舞伎を鑑賞しました。

朝11時、竜の子奨学生たちは半蔵門駅の出口に集合し、一日の交流会がスタートしました。久しぶりに会ったのでみんなのテンションが高く、お互いに近況を話しながら国立劇場に移動しました。

国立劇場に入って最初に目に入ってきたのは、本物サイズの歌舞伎人形でした。その名は「鏡獅子」、日本近代を代表する彫刻家の一人である平櫛田中さんの作品です。彫刻と知りながらまるで生きているように見えて感動しました。



「鏡獅子」の前で集合写真を撮りました

「鏡獅子」の前で集合写真を撮ったあと、開演時間が迫ってきたので、みんな一緒に二階席に移動しました。2014年の締めくくりとして上演された今回の歌舞伎の演目は「通し狂言 伊賀越道中双六」です。五幕六場で構成され、休憩時間を含め4時間を超える舞台となっています。最後まで集中力が持つかどうか少し心配でしたが、まずは楽しもうという気持ちで臨みました。

序幕「相州鎌倉 和田行家屋敷の場」は、二人の女中の話から始まりました。初めて女形を見て、その振る舞いがとてもおしとやかで、歌舞伎役者の演技力に驚きました。和田行家と女房が登場し、娘のお谷が唐木政右衛門と駆け落ちしたことについて、政右衛門が官職につくことを条件に、行家はその結婚を認めると言いました。しかし和田家の宝刀「正宗」を狙っていた沢井股五郎によって、行家が殺されてしまいました。

二幕目「大和郡山 誉田家城中の場」では、主人公政右衛門がはじめ登場しました。敵討ちに旅立つため御前試合でわざと負けたが、政右衛門の剣術を高く買っていた主君・誉田大内記はそれを疑い、自ら政右衛門に挑みました。政右衛門は秘伝の剣術で大内記を制したが、その心中が大内記に見ぬかれました。大内記は賢君で、政右衛門に志津馬を対面させ、自分の刀を授け、出立させました。

三幕目「三州藤川 新関の場」では、お袖と志津馬が出会いました。お袖が志津馬に一目惚れして、お茶が入っていない茶碗を出してしまったところは大変面白かったです。志津馬がお袖に関所の抜け道を聞いたところ、沢井家の奴・助平が都合よく登場しました。助平はお袖のすすめで望遠鏡を覗いたら、夢中になって、つい志津馬に通行切手と書状を奪われてしまいました。「裏手竹藪の場」では、関所の門が閉まったあとに着いた政右衛門は竹藪をくぐって関所破りに成功しました。政右衛門のあとに竹藪をくぐった助平は役人に囲まれ、真っ暗の中に助平を捉えようとする役人と逃げようとする助平の行動は今回の歌舞伎で一番滑稽で面白かったです。また、二幕目の大内記と三幕目の助平は同じ人が演じていました。振る舞いも性格も完全に違う二人を見事に表現する演者の演技力に感銘を受けました。

四幕目「三州岡崎 山田幸兵衛住家の場」は「起承転結」の「転」に当たります。山田幸兵衛の娘・お袖は志津馬と一緒に家に帰り、志津馬を泊めようと思いました。しかし、お母さんのおつやは昔沢井股五郎との縁談があったことを考え、それを許そうとしなかったが、志津馬は助平から奪った書状を見せ、股五郎になりすましました。また関所を破った政右衛門は15年ぶりに師匠幸兵衛と再会しました。幸兵衛は弟子の現在の名は唐木政右衛門と知らずに、股五郎の助太刀を頼み、政右衛門も股五郎の居場所を得ようとして引き受けました。しかしその後、生まれたばかりの子供を抱えたお谷がやって来て、雪が降り続く寒い中倒れてしまいました。それをあわれむおつやは子供を家に入れ、政右衛門の子だと知り、幸兵衛は人質にすると考えました。政右衛門は敵討ちを成し遂げるため、自分の子を殺したが、その目に一瞬涙が浮かびました。それに気づいた幸兵衛は彼の正体を知り、心が動かされ、志津馬に引き合わせた上で政右衛門の行方を教えました。

大詰「伊賀上野 敵討の場」では、まさにクライマックスにふさわしい殺陣を見ることが出来ました。政右衛門は股五郎の助っ人を切り倒し、志津馬は股五郎と1対1で対決し、股五郎を打ち取って幕が降ろされました。

ほとんどの竜の子奨学生は初めて歌舞伎を見たので、日本の伝統文化に触れて、大変いい体験をさせていただきました。

歌舞伎のあと、電車組と徒歩組に分かれ、東京駅近くのレストランへ移動しました。徒歩組の人は、途中で国会議事堂や最高裁判所も見ることができました。

レストランに着くと、18時頃から夕食会が始まりました。前菜からお造り、揚げ物や、甘味まで、すべての料理が芸術品のように美しく、最高に

おいしかったです。

翌日授業があるので、夕食会は21時頃に終了しました。一日があっという間に終わって少しさびしかったです。久しぶりに竜の子奨学生のみなどと会って、歌舞伎を観て大変楽しかったです。また今回の歌舞伎をきっかけに、日本の伝統文化についてもっと知りたいと思いました。



国会議事堂を背景に撮影した一枚



芸術品のような料理

(担当：平成26年度竜の子奨学生 東京大学大学院 郭 中梁)

財団活動報告

● 空手道（2ルール）をオリンピックへ ●

青少年育成・国際交流・社会貢献という当財団と志を同じくし、交流会でもお世話になった新極真会の署名活動に参加し、1万人を超える方々に署名をいただきました。

この度は、日本古来の武道である空手道（2ルール）をオリンピック正式種目採用に向けての署名活動にご協力いただきましてありがとうございます。全日本フルコンタクト空手道連盟の緑健児理事長よりお礼の言葉を頂いておりますので、一部抜粋してご報告申し上げます。

「空手道（2ルール）の2020年東京オリンピック正式種目採用に向けたご署名活動において、103万3,095人の皆さまからご署名が寄せられましたことをご報告申し上げます。

約1カ月という短い募集期間ではありましたが、多くの皆さまに耳を傾けていただき、ご理解とご賛同をいただきました。この度、ご署名という力と心、そして勇気を託してくださいました全ての皆さまに深い感謝の意を表します。また、この署名活動においては、その募集に東奔西走し、貴重な時間と労力を割いて

いただいた世界中の同志の協力なくしては100万人という目標の実現は成しえませんでした。こうした運動に尽力していただいた全ての同志の皆さまに心底からの感謝を申し上げます。本当に有難うございました。

さて、本当の戦いはこれからです。全世界中の皆さまに託して頂いた103万3,095人の力を預かる責任を重く受けとめ、皆さまのご期待にお応えできますよう関係各所と連携をしながら全力で空手道、特にフルコンタクト空手競技のオリンピック参加という夢の実現に邁進して参る所存でございます。」



竜の子近況報告



新潟大学で発表している様子

ピョー インウィン (ミャンマー・シュエジン)

京都大学大学院 情報学研究所 修士2年

「忙しいが故に充実感が溢れる学生最後の学期」

今学期は大学生の中で一番と言えるほど、学業や交流活動で忙しい学期です。11月は研究の一環として、ベトナムで開催された「ASOCIO ICT SUMMIT 2014」に参加し、その後、ミャンマー、インドで調査を行いました。そして、今までの調査結果を元に情報処理学会で発表致しました。一方、国際交流活動としては現在所属している京都府名誉友好大使の活動としてカンボジア料理教室の責任者を勤め、企画、運営、開催まで行いました。高校訪問や中学校訪問も時間がある限り、参加させていただき、ミャンマーの文化紹介を行っています。また、そろそろ研究（調査）を終わらせて、修論を書き始めないといけないので、まだまだ忙しい日々が続きます。



発表している様子

レ ティ テュ ヴァン (ベトナム・ハノイ)

九州大学大学院 法学府 修士1年

「実りのある学期」

今学期は、私にとってとても実りのある学期でした。私は2つの会議に参加しました。1つ目は、10月にチェコのCharles大学で行われた高等教育における持続可能な発展についての会議です。2つ目は、12月に韓国のヨンセ大学で行われた東アジアの発展と行政についての会議です。私は、世界における発展の最新トレンドについてたくさんの国の教授や専門家、学生とプレゼンテーションをし、議論する機会を得ました。これらは将来途上国の発展のためのプロジェクトを行っているNGOや国連や世界銀行で働くという私の願いへのよい準備となりました。加えて、良い成績を取めた前期は、今年の9月以内にプログラムを修了させるというさらなるモチベーションになりました。



Bangladesh Weekのグランドショーに参加しました。

シャリアズ エムディ (Bangladesh・チッタゴン)

立命館アジア太平洋大学 国際経営学部 2年

「 Bangladesh Week」

最近APUで Bangladesh Weekを行われました。ウィークというのは一週間である一つの国出身の学生たちが様々なイベントを行い、自国の文化などを提示するイベントです。私は Bangladesh Weekの副代表として参加させてもらいました。大学中の100人を超える数の学生が、ウィークを主催する参加者として、私たちコアメンバーと一緒にイベントを主催しました。



長崎の夜景

ロ シブン 呂 思文 (中国・遼寧省)

東京海洋大学 海洋科学技術研究所
食機能保全科学専攻 修士2年

「学生時代最後の努力」

時間の経つのが早いもので、修士課程ももう少して終わります。去年12月ごろに新しい部屋に引っ越しました。そして、年末に広島に住んでいるおばさんの家に行って、家族と一緒に長崎へ行きました。今は落ち着いて、修士論文の発表と提出に向けて頑張っています。先月、論文を英語で発表することに決まりましたので、英語が苦手の私にとっては最後の挑戦となり、緊張感を持って過ごしています。充実満ちた最後の学生生活を送っています。



熊ちゃんから癒される

キム テヒョン

金 兌炫 (韓国・ソウル市)

京都大学大学院 工学研究科 博士3年

「辛さを原動力として」

今年度の卒業に向けて勉強や研究を頑張ろうとしたところ、急に自分を指導してくれた助教の先生が10月をもって退官し会社への転職することになり、卒業に向けての準備が非常事態になりました。しかし、間に合わず今年度の卒業はできないことになりました。今年度卒業に向かって頑張った時や卒業できなかったことが決まった時、「竜の子」の皆様から励ましの言葉も頂き、元気を貰いました。

そこで、今年卒業できなかったことを辛いものだと考えず、これが自分の人生のためのいいチャンスだと考え直すことにしました。そこで、今年の辛さを原動力として、来年度の卒業の準備や自分の研究における勉強に頑張ることにしました。

頑張ります。(笑)



友達と一緒に高尾山に登りました

シュ リン

朱 琳 (中国・黒龍江省)

東京外国語大学 総合国際学研究科
国際協力専攻 修士2年

「修論執筆中」

今年の3月卒業を迎える朱琳です。竜の子財団に恵まれた2年間で、みなさんと一緒に素敵な思い出が作ることができて、とても幸せでした。「さよなら」なんか言いたくないですが、ついに自分もこの時期を迎えます。今は修士論文を一所懸命書いているところです。2年前大学院に入った時、よく先輩に「論文を書いている人が孤独だ」と半分冗談のように言われていましたが、その意味がようやくわかりました。今までの研究をどうやって修士論文で完璧に出すのか？どうやって自分の考えを上手く表現するのか？それを全部自分で完成しなければならない作業です。毎日に家で修士論文を書くというすごく単純な生活を送っていますが、時には気分転換として友達と登山したりもしています。



イスタンブルにて (本人：右端)

イ デイヨン

李 大英 (韓国・ソウル市)

北海道大学大学院 水産科学院 修士2年

「国際学会で無事に発表してきました」

10月末にイスタンブルで行われた栄養・機能食品学会 (ISNFF) に参加して来ました。世界各地から集まった健康食品の科学者とディスカッションができ、大変良い経験をしたと思います。また、学会が終わってからイスタンブルの観光も楽しんできました。来年からも健康機能食品に関する仕事に携われる予定であり、これまで勉強した知識と経験を活かして、世界的に自分のキャリアを積んで行きたいと考えています。



アンコールトムの前にて

ボウ フクメイ

房 福明 (中国・湖南省出身)

東京工業大学大学院 総合理工学研究科
博士1年

「国際学会に行ってきました」

最近、国際学会でカンボジアに行ってきました。発表を準備しながら、研究も取り組んでいますので、発表用のスライドは出発の直前に完成しました。発表練習は間に合いませんでしたので、会場に着いてすぐに練習を始めました。発表は無事にできましたが、私の研究を初めて見る人に対しても良く分かるように発表する必要があると先生のコメントがいただきましたので、これからは発表の内容を分かりやすく伝えるように、流れや構成を工夫する必要があります。発表以外の余裕があるとき、現地も廻ってみました。観光地であっても、売店の人はそんな多言語を操ることがないだろうと思っていたのですが、驚きました。国際発表により、技術において最新の動向や現地の文化なども理解するため、これからもたくさんの国際発表をできるように頑張りたいと思います。



合同ゼミの発表大会にて（本人：左から三番目）
 オウ アキン
王 娅琴（中国・江蘇省出身）
 明治大学 政治経済学部 経済学科 3年

「就職活動準備中…」

就活解禁日が段々迫ってきた今、ゼミの皆の動きを見ていると自分は不安になり何とかしなきゃと考えています。自分はどの業界に行くのか、どんな会社で働くのか、何の仕事をするのか、会社に入ってちゃんと一人前の社会人として働いて会社に役に立てるかなど、不安を持ちながら色々なセミナーや説明会に足を運んでいるところです。時間は無限にはありません。悔いの残らないよう就活に取り組んで行きたいと思います。

写真は先生とゼミ生達と一緒に撮ったものです。中村ゼミは私達の36期で最後期となります。他ゼミとの合同活動で退官の話をされた先生にお花を贈りました。学問を教えていただく他にゼミ生の生活管理や就活などにたくさんの関心を持ち応援をしてくださいます。自分にとっては家族のような存在です。



熱海での気分転換
 チン カ
陳 佳（中国・上海市出身）
 一橋大学 商学研究科 修士1年

「修論に取り組んでいる日々」

私は最近修士論文の執筆に取り組んでいます。日本と中国の消費者行動を中心に研究を進めており、現在は回収したアンケート結果を分析している最中です。論文の提出締め切りは一月の上旬になりますが、できれば年内に仕上げたいお正月を迎えたいと思っています。また、年末に論文の最終発表会があり、そのための発表資料も作成していました。論文を執筆している間は、誰とも喋らず、どこにも出かけることが多いのですが、この間気分転換で熱海に行ってきました。広大な海と青空に癒やされました。



熱々の水炊きを前に
 グォ チョンリャン
郭 中梁（中国・山東省出身）
 東京大学大学院 理学系研究科
 化学専攻 修士1年

「研究と就職活動の両立に頑張っています」

修士課程に入学してもうすぐ一年経ち、研究が忙しくなる中で、就職活動も始めました。自己分析やエントリーシートなど初めてやることが多く、少し戸惑っています。友人や先輩からたくさんのアドバイスをいただきながらじっくり考えて、自分が納得できる結果を出したいと思っています。また博士に進学することも視野に入れてありますので、研究においても手を抜かず、できれば修士卒業までに結果をまとめて論文にしたいと考えています。

時間が限られている中、研究と就職活動の両立がとても難しいが、自分のキャパシティを広げるチャンスだと思ってチャレンジしています。未来への希望と不安を抱きながら、情熱と冷静さのバランスを保って前に進むことを目標にしています。



魔法の世界の扉で（本人：左端）
 リョウ チョウ
呂 澄（中国・遼寧省出身）
 京都大学大学院 工学研究科
 合成・生物化学専攻 修士2年

「最後の学生生活を思い切り満喫」

またひとつ日本での新年を迎えました。学生時代の終わりを告げるように、京都も雪に恵まれました。今年の初詣は日本で初めて初詣に行った伏見稲荷大社にお参りしてきました。懐かしいと感じながら、未来に向けてお稲荷さんに家族の健康と今年も確実に成長できる一年になりますようにとお願いしてきました。

そして冬休みのうちに実験室にこもる生活から脱出し、友達と久しぶりにユニバーサルスタジオに行きました。ハリーポッターの魔法の世界は魅力的で夢のようでした。

その後は一気に夢の世界から現実にもどり、修論と学会の準備に没頭しています。部屋探し、引っ越しに卒業旅行もあり、手一杯で気持ちの余裕がなくなかなか整理ができていません。しかし、生活というのは準備万全にしてから臨むものではないかもしれないと思いました。今を、目の前の人を、大切にすればきっと後悔のない時間を過ごせると思います。思い切って「今」を楽しんでいます。



高尾山にて（本人：左）

キョ リンヨウ
許 臨揚（中国・江蘇省出身）
 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科
 博士3年

「博論完成」

最近のキーワードは「博論合格」です!!! これで、23年間の学生生活に終止符を打つことができました。そして、先週とうとう博士修了の最後のステップ「博論口頭諮問」のお知らせが出ました。とてもうれしいです〜最後の最後まで頑張りたいと思います。

23年間の学生生活を振り返ってみると、本当に感無量でした。特に、日本に来たこの8年間、いろいろありましたが、みなさんのおかげで、なんとか乗り越えられました。研究者の道は決して楽ではありません。しかし、その道は自分が選んだので、頑張ってきた。そして頑張っていくのは当然なことです。また、その道を歩いていく自分を支えてくださる竜の子財団、友達、家族、先生方に本当に感謝しています。本当にありがとうございました。みなさんの支えに応えられるようこれからもっともっと頑張っていき、立派な研究者になることだけだと考えております。それを目指して頑張っていきたいと思います!



韓国で開催するCOP12の会場外、発表直前に笑顔で緊張をほぐしている様子

シン チュウカ
申 中華（中国・河北省出身）
 東京大学大学院 農学生命科学研究科
 博士3年

「22年の学生生活に綺麗な句点を付けるように頑張ってます」

今年は大学院の修了年度にあたり、博士論文に没頭しています。自信满满に先生に原稿を提出すると、真っ赤な修正コメントがたくさん付いたまま戻ってくる度にショックを受ける。そのような日々を繰り返しています。

昨年10月、韓国で行われた国連生物多様性条約締約国会議COP12のサイドイベントに参加し、研究グループの代表として最新の研究成果を紹介してきました。そこでたくさんの方の友達を作りました。同じ10月、指導教員が中国の大連海洋大学で講演を行い、私も同行させていただき同時通訳を担当いたしました。



学園祭の様子（本人：左）

チン エンライ
陳 行磊（中国・浙江省）
 東京電機大学 工学部 3年

「パワーエレクトロニクス研究室に決まりました」

昨年、パワーエレクトロニクス研究室に決まりました。いよいよ本格的に専門分野について研究して行きたいと思っています。この前、年一回の学園祭を行いました。留学生会も他のクラブと同様に店を出しました。みんなと一緒にテントを造ったり、いろいろな国の料理を作ったり、販売することを楽しみました。

これからの予定ですが、卒業研究のため、DSPというプログラムを勉強していきたいと考えています。また、大学院に行くことが決まったので、四年生になったら、卒業研究だけでなく、大学院課程も履修していきたいと思っています。



卒業式
 （本人：左）

モハメド サルージ イシレット アハメド
 （スリランカ）
 立命館アジア太平洋大学 国際経営学部4年

「卒業できました」

昨年9月学校を卒業することができました。卒業式にスリランカから私の家族も来ましたので久しぶりに家族と九州のいろいろなところに旅行しました。今年の4月から京都で掘場製作場で働くことを予定しています。今はスリランカにいますが来年会社で働く際に日本語が重要なので日本語を上達させるためビジネス日本語を勉強しています。久しぶりに母国へ帰りましたので家族と様々なところに旅行してきました。3月の交流会でお会いできるのを楽しみにしています。



竜の子(OB・OG)近況報告



僕の27歳の誕生日会で、少し硬いがちゃんと笑っています。

ギ トウキ
魏 登輝 (中国・河南省)
東京外国語大学卒業

「頑張ってる笑っています」

私はここ一年間どこにも長期出張することなく、ずっと名古屋で暮らし、名古屋で仕事をしています。仕事内容も以前と変わらず、日本の中古商用車の輸出をしています。先日、仕事仲間から自分の27歳の誕生日会を開いていただき、みんなで笑いながら楽しく過ごし、日本にいる一中国人として、家族以上の温もりをいただきました。

2015年は日中関係にとっても、大事な一年と見られています。民間交流において、お互いに誠意を持った努力を続ければ、より多くの笑顔が必ず見れるでしょう。



☆カラオケの前にみんなで集合写真☆(本人:左端)

コウ エン
黄 艶 (中国・瀋陽市)
日本大学卒業

「12月6日の懇親会」

長い間竜の子奨学生たちと会っていなかったもので、みんなで飲み会をしました。久々に見る顔、新しい顔、何にも気を遣わず、気軽にお話ができて本当に楽しかったです。各自の最近頑張っていることだけでなく、悩んでいることを本音で話し合っ、冷静さを失って判断できないことも客観的にアドバイスをいただいたり、また、カラオケを歌って発散して、とても貴重な時間を過ごすことができました。また、みんなで飲みましょう。今後もよろしくお願いします。他の竜の子奨学生のみんなも時間ができたら、ぜひ参加してください。



陽澄湖にて

デン アンナ
田 安娜 (中国・遼寧省)
九州大学大学院卒業

「中国での新生活」

2013年3月に九州大学大学院理学府修士課程を卒業しました。2014年7月に中国に帰国し、京セラケミカル(無錫)に勤めています。現在無錫支社長のアシスタント(総経理助理)と通訳を担当しております。過去本社で積んだ経験を最大限に発揮でき、一層仕事のやりがいとおもしろさを感じております。仕事以外の生活も充実しており、ヨガとベリーダンスを練習し始め、たくさんの友達ができて、綺麗な江南の景色を楽しんでいます。今後とも自分の身を磨き、プロフェッショナルになり、グローバルな人材を目指して頑張りたいと思っています。



家族で日光東照宮を訪ねた時の記念写真です。

リ ケイホウ
李 慧芳 (中国・遼寧省)
東京工業大学卒業

「研究と家庭を両立できるように奮闘中」

2012年の卒業生の李慧芳です。現在東京大学で有機半導体材料の開発に勤めています。そして、2014年4月に引越をして、千葉県民になりました。家庭と研究を両立するように研究計画を立てて、時間管理をしています。



チームの打ち上げパーティ

シュ シン
朱 震 (中国・陝西省西安市)
京都大学卒業

「仕事、頑張っています」

入社してからずっと新規ゲーム開発でプランナーを担当していましたが、2014年9月から別の新規事業の提案を行って立ち上げに携わることになり、実質2つのプロジェクトの掛け持ちをしています。どちらも新規ですが、内容は大きく違います。ただし、一番共通しているのは、ものづくりに対する強いこだわりでした。概要から細部まで、労を惜しまず議論をし、時には意見がぶつかってケンカになりがちでした。目的はただ一つ、自分が納得できる最高のものを顧客に提供するためです。これはまさに私が日本で一番学びたいもので、今、充実した毎日を過ごしています。



昨年11月末香嵐渓に行った時撮った写真です。

リュウ チボン
劉 知凡 (中国・遼寧省大連市)
東京大学卒業

「車を買いました」

免許を取ったのは大学卒業前で、すでに4年近く経ちました。今までは立派なパーパードライバーとして電車と自転車生活で生活して来ましたが、この度やっとの思いで車を買いました。

車を買ってからすでに半月が経ちましたが、まだまだ運転に慣れてなくて、最大限の注意を払いながら、対向車と歩行者に怯えています。これからは運転技術を磨いて、いつか運転の楽しさを感じれば良いと思います。(今はまだ楽しく無いです…)



ウィリアムスンカ
ウンティーコミュニ
ニティーサービス
ビルのなかで

キム ジウォン
金 智媛 (韓国・ソウル市)
一橋大学在学

「ボランティア活動をしています。」

昨年末になり、私の住んでいるフランクリンではドネーションが活発に行われました。グロサリーストアのレジで少額の食品の寄付もできますし、夫の会社でも貧困層の子供たちの書いたカードにもとづき、必要な物のリストが作成されるなど様々な形があります。もちろんカウンティー（日本の県にあたる）でも家や、食べものに困っている人を支援しています。私は昨年12月からカウンティーのコミュニティーサービスビルでボランティア活動を始めました。人が来たら申請書を配り、担当者に案内をする仕事ですが、多くの人がこの冬を暖かく過ごせるように微力ながら頑張りたいと思います。



大阪出張した際、通天閣にて

リン キリュウ
林 熙龍 (中国・福清市)
電気通信大学卒業

「SEの仕事を頑張っています」

社会人になってから約11ヶ月が経ちました。3ヶ月の研修を経て今はプロジェクトの一員として、SEの仕事をしています。

4月の頃は満員電車や仕事のスピードにとっても慣れなくて、うまくいかないことがたくさんありました。竜の子財団で学んだ「死力達成」という言葉を心に刻んで、努力してきたおかげで、今はやっと忙しい社会人生活に慣れて充実した日々を送っています。

また、皆さんに報告したいことが一つあります。私は大阪の事業所に配属することとなりました。今年の3月まで東京の大森で勤務しますが、4月から大阪に転勤します。

仕事の関係で、昔のように竜の子奨学生の皆さんと交流することができませんが、卒業しても私が「竜の子」ということは昔と同じで変わりありません。いつかまたお世話になった秋元理事長はじめ、皆さんにお会いできればいいなあと思います。

SPECIAL REPORT I

● ミャンマーって実は・・・？ ●

数年前、日本に来たばかりの時は「出身はミャンマーです」と言うと、「アウンサンスーチーさんの国ですね」といつも返されたのを覚えています。しかし、最近では政治的な改革が進むと同時に、閉鎖的だったミャンマーに先進国の注目が集まり、日本でもテレビ等でよく取り上げるようになって、ミャンマーのことは以前より少し知名度が上がったようです。しかし、まだまだミャンマーには知られていないことが多くありますので、それらを紹介させていただきます。

まず、ミャンマーには8つの主要民族と130以上の少数民族が住んでおり、5000万人以上の人口の90%は仏教徒であるので、ミャンマーは仏教国としてよく知られています。仏教の建物といえば、観光地としても有名なシュエダゴンパゴダです。

しかし、最近ではチャイディーヨーパゴダ（Golden Rock）とも知られている）はミャンマーの人の中でもかなり人気が高く毎年観光客が増え続けています。理由は山頂にある岩の上に岩が危うくのっており、落ちそうで落ちない不思議な形は人気を集めている。それは岩の上のパゴダに仏陀の遺髪が納められているからだと言われています。



チャイディーヨーパゴダ

そのようなパゴダ（仏塔）の周りに各曜日にお祈りできる小さな仏像が当然のように置かれています。ミャンマー人はパゴダに行く時に、自分の生まれの曜日に水や花をお供えます。水は歳の数だけ仏像にかけたりします。では、なぜミャンマー人は自分の生まれた曜日を大切にしているだろう。そもそもミャンマー人はなぜ生まれた曜日を覚えているだろう。その秘密は名前の付け方にあります。ミャンマー人の名前に「姓」がないことが知られていると思いますが、名前の最初の文字は生まれた曜日で決められているのが多いです。各曜日に決められた音があり、例えば、月曜日生まれは（ka, kha, ga, nga）といった音から始める音を、火曜日なら、（sa, za）等の音から始める音を名前の前に付けたりします。それに、古いも曜日で占うことが多く、結婚さえ曜日の相性で決めることが



木曜日生まれのお祈りするコーナー（本人右端）

あるので、ミャンマー人にとって生まれた曜日はとても大切です。

ミャンマーには宗教的な祭りも含めて一年中いろいろな祭りが行われています。日本で



お正月の水祭り

は一年の中でお正月が一大イベントと言えるでしょう。ミャンマーもお正月が一大イベントですが、時期が異なります。ミャンマーのお正月は西暦でいうと、4月の中旬ごろです。

ミャンマーには夏、雨期、乾期と3つの季節がある中で4月は夏に当たります。そのため、ミャンマーのお正月は夏で一年の汚れを落とすという意味も含めて、新年までの4日間は水祭りが行われます。

せっかくなのでミャンマーの食生活についても少し述べたいと思います。ミャンマーの主食は米で、おかずは（ヒン）といって、豚肉、鶏肉、牛肉等々をそのまま脂で煮込んだり、ジャガイモなど野菜を入れて煮込んだりしたものと一緒に食べます。

食べ物は少し脂っぽくて、塩辛い物が多いです。それはミャンマーが暑い国なので、料理を腐敗しにくくするためや汗が出るのを防ぐためにそのような味付けにし、昔から食べられています。また、魚のスープと素麺に似た米から作った麺と一緒に食べる「モヒンガー」もミャンマーの食事を語るうえで欠かせないものです。そして、隣国のタイ料理の味付けはミャンマーの人のお口に合うので、海外に住んでいるミャンマー人はよくタイ料理屋に足を運びます。最近では、のり巻き、キムチ、天ぷら、寿司、ラーメン等韓国料理、日本料理などが海外から入って来たので、食生活も変わりつつあります。



モヒンガー

ここまでいろいろなミャンマーのことを紹介してきましたが、実はミャンマーは昔から日本と深い関わりがありました。それも、日本人はよくご存知のノーベル平和賞を取ったアウンサンスーチーさんの父親「アウンサン将軍」は第2次世界大戦中、当時イギリスの植民地だったミャンマーの独立運動を起こした「30人の志士」と呼ばれる人達を率いて、日本軍と協力関係を結び、共に訓練を受けて、イギリス軍と戦ったのです。このように昔から長い付き合いがあったミャンマーに一度足を運んでみてはいかがでしょうか。

（担当：平成26年度竜の子奨学生 京都大学大学院 ピョー イン ウィン）

SPECIAL REPORT II

● 故郷のハルビン ●

「ああ、寒いところですね」。

出身地はハルビンと聞いて、相手はいつもそう言いながら頷いてくれる。

北京や上海ほど有名でなく、中国東北地方の北にあるその都市は、私の故郷である。黒龍江省の政治、経済、文化の中心として、面積53,068km²、1063.5万人口の大都市であるが、中国はあまりにも広いから、「ハルビン」という名前くらいだけ知っている人が多数である。外国人はそれ以上知っている人は少なく、何とかハルビンのことを知っている日本人のお年寄りでも、「満州」というイメージしか持っていないだろう。

歴史や地理などの原因で、ハルビンではたくさんのロシア人と日本人が集まっていたので、ロシア風の建物がたくさん残っている。ハルビンで一番有名な、百年の歴史を持っている「中央大街」はそういう大通りである。ルネサンス式、バロック式、「東方のパリ」と呼ばれる西洋風の街並みが一直線にハルビンの母親と呼ばれる「松花江」に向かっている。



中央大街一隅

また、食べ物も大体ロシア風である。その中で「ハルビンソーセージ」（中国語：紅腸）はもっとも有名である。ロシアの伝統的な製法によって出来上がった紅腸は棗の色をし、数時間の燻製で、肉の香りをよく生かしている。また、紅腸は大蒜の味がして、中に多くの肉が入って、ビールととても相性がいいのである。ロシアパンに挟んで食べるのもおいしい。また、「ハルビン・ビール」も1900年から百年以上の歴史を持ち、中国では有名なブランドである。



紅腸とハルビンビール

ハルビンははっきりとした四季を持っている。「ハルビンの夏は涼しいでしょう？」とよく聞かれるが、「熱いですよ」といつもそう答えている。ハルビンは顕著な大陸性気候であるから、夏と冬の温度差が非常に大きい。しかし、室内ではめったにエアコンを付けな

い。空気が東京ほどジメジメしていないから、いつも乾燥している。外はいくら暑くても、室内や陰のあるところに入ると、すぐ涼しくなる。また、部屋の中では暖房がついている。冬になると、団地を単位に「集中供熱」を行うから、室内は春以上に暖かい。

とはいえ、外の寒さはやはり普通ではない。1月の平均気温は-18.6度で、世界の大都市の中では最も寒い部類に入る。朝の最低気温は平均で-23度にまで下がり、-40度以下まで下がることもある。この寒さのため、ハルビンは「氷の町」（中国語：氷城）と言われている。

「そんな寒さで生きられる？」

近年、ハルビンは冰雪観光産業に力を入れている。毎年各国からの観光客が冰雪を楽しむために訪れるが、この寒さのため、ハルビンの独特な冬を味わうことができるのはやはりまだ少数である。

毎年1月から2月には「ハルビン氷祭り」（中国語：冰雪節）が行われている。夜になると点灯され、目の前の世界が真っ白から色とりどりに変わる。鮮やかな灯は欧州風の建物と、冰雪の世界でお互いに照り映えて、ハルビンは夢の世界になる。



冰雪大世界

また、道端にある屋台もハルビンの冬の独特な風景になる。大量のアイスは冷蔵庫の中ではなく、道端に陳列されている。夏よりはずっと安い値段で、お母さんはいつも一回20本くらい買ってしまふ。家に帰ったらベランダにそのまま置く。ベランダにあるアイスは、当時小学生だった私の冬休みの最高の思い出になっている。

東京に来て3年目。ハルビンの冬はもう2年ぶりである。ハルビンの雪、ハルビンの町、ハルビンの風、また家族の笑顔と温かい春節の餃子……実は、我々は故郷を出た瞬間、すでにその全てをカバンに入れた。そのカバンを背負って、我々は人生の道を歩んでいる。いつも順調にやっている人もいれば、いいことより挫折が多い人もいる。嬉しい時には両親にただ電話をかけたたりもするが、泣きたい夜には、それをカバンから出し、触ったり読んだり嗅いだりする。そうして、翌日の朝、また前に進み続ける勇気を得る。

（担当：平成24年度竜の子奨学生 東京外国語大学大学院 朱 琳）

編集後記

委員長 東京外国語大学大学院 ジュリン 朱 琳

この度、竜の子奨学生の第15号会報誌の編集長を務めさせていただきました。一昨年は、編集委員を担当したことがありますが、編集長になると、責任も違うので、うまくできるかどうかかわからなくて不安でした。幸い、編集委員の皆さんと協力しあって、完璧に完成することができました。私は担当したのはスペシャル・レポートⅡでした。下手な日本語ですが、故郷のハルビンの魅力、及びそれに関する思い出をこの文章で紹介したので、ぜひ読んでみてください。

副委員長 東京大学大学院 ゴウチュウリヤン 郭 中梁

皆さん、会報誌を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

正直、最初編集委員を任された時、少し不安でしたが、会議に参加するたび、みんなと話し合いながら、会報誌が完成に近づくのを見て、だんだん楽しくなりました。

今回は12月の交流会を担当しており、当日の様子を思い出しながら書いていくと、やはり交流会は楽しかったなあと再確認できました。また編集会議でお互いの文章を読み合い、意見を出しあったことが大変良い経験になりました。本当にありがとうございました。

委員 名古屋大学大学院 キョウリンヨウ 許 臨揚

「竜の子奨学生」会報誌の編集委員として第15号の編集に携われとてもうれしかったです。第15号の会報誌には第25回交流会、高知研修旅行の1日目の執筆を担当させていただきました。雑誌編集も初めての経験だし、テレビ電話を利用する会議（仕事）も初めてだったので、とても新鮮でいろいろ勉強になりました。作業は決して楽とは言えませんが、仲間と協力しあって作り上げたものが最高に思います。そして、この会報誌を通して、少しでも竜の子奨学生たちのこの1年間の努力や成長をお伝えできればと思います。

委員 東京電機大学 チンエンライ 陳 衍磊

この度、編集委員を務めさせていただきました。任された時に自分の日本語力で大丈夫かなと心配しながら、一回目の会議に参加しました。しかし、編集の担当の方が優しく教えてくださり、同じ編集メンバーと楽しく交流できて、安心しました。そして、奨学生の近況報告の取りまとめという担当でしたので、みんなとメールで連絡できて嬉しく、いい経験になりました。また、資料不足の時、みんな早速に補充していただき、ありがとうございました。

委員 京都大学大学院 ピョーインウィン ビョー インウィン

この度は編集委員を務めさせていただきました。編集会議を通じて奨学生同士の交流を深めることができました。今回の会報誌では、スペシャルレポートⅠとして母国、ミャンマーのことにについて執筆の機会を頂けてとても光栄です。そのレポートはミャンマーの紹介よりはミャンマーのことに興味を持っていただけるきっかけにしてほしいと思ったので、読んだ後にミャンマーのことをいろいろ調べていただけると嬉しいです。

委員 明治大学 オウアキ 王 姫琴

今まで編集作業の経験がなかったので、この機会に編集委員を担当することができて良かったと思います。良い経験と刺激を受ける事が出来ました。

他の編集委員達と交流することで、みんなの真面目さを感じることができました。文章の修正もみんなに多くのアドバイスをもらい勉強になりました。今回は色々な所で自分の力不足も感じましたが、機会がありましたらもう一度頑張ってみたいと思います。



第3回編集会議にて



第2回編集会議後にて



第1回編集会議にて

「その夢はきっと世界を変えていく」

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている
 その夢はきっと世界を変えていく 平和のため
 いろんな事があるけれども どんなときでも

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に
 夢 希望をかなえる為 みんなは生きている
 その夢はきっと世界を変えていく かならず